

研究

幼稚園教諭らに対する ペアレント・プログラム教師版の効果

徳永 瑛子^{1) 2)} 久保 結花²⁾ 辻井 正次³⁾
今村 明^{2) 4)} 田中 悟郎^{1) 2)} 岩永竜一郎^{1) 2)}

要旨：

ペアレント・プログラムは子育て支援の手法として作成された保護者支援プログラムである。このプログラムをアレンジしたペアレント・プログラム教師版を幼稚園教諭らに実施し、その効果を検証した。

教諭らにプログラム実施前後で精神的健康度と子どもの情緒や行動について回答してもらい、そのスコアの変化を分析した。

分析対象となったのは68名の女性で、K6の得点およびSDQの「仲間関係」「向社会性」「TDS」において得点が改善した。

この結果より、ペアレント・プログラム教師版は、幼稚園教諭らにも有効で、教諭らが精神的健康度、教諭らの子どもの行動に対する認識、または子どもの行動自体に良い影響を与える可能性が示唆された。

キーワード：ペアレント・プログラム教師版、支援者支援

はじめに

ペアレント・プログラムは、効果的な保護者支援、ライフステージに応じた切れ目のない支援(縦の支援)と保健、医療、福祉、教育、就労支援等とも連携した地域支援体制(横の支援)の連携を充実させる目的で特定非営利活動法人アスペ・エルデの会において開発された親を対象としたプログラムである。このプログラムでは、発達障害をもつ子どもの親だけではなく、全ての親が対象となる。発達障害のある子どもを持つ親への支援と

しては、応用行動分析に基づいたペアレント・トレーニングが実践され効果がみられている^{1) 2)}。ペアレント・トレーニングとペアレント・プログラムの異なる点は、ペアレント・トレーニングが応用行動分析に基づいたものであるのに対して、ペアレント・プログラムは一般的な子育て支援として普及しやすい内容で構成されているという点である。ペアレント・トレーニングは子どもの行動の変容を期待するものであるが、ペアレント・プログラムでは親の認知的変容を標的とし、親および子どもの肯定的な見方の獲得を目指している。ペアレント・プログラムで扱うスキルは「行動を見る」「ほめる」という基本的なものであるため、ペアレント・トレーニングほどの対象児の行動変容を期待しづらいが、一般的な子育て支援

1) 長崎大学生命医科学域

2) 長崎大学子どもの心の医療・教育センター

3) 中京大学

4) 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科

として受け入れやすい可能性がある。

ペアレント・プログラムの目的は①親が子どもの「性格」ではなく、「行動」で考えることができるようになること、②子どもを叱って対応するのではなく、できたことに注目してほめて対応すること、③親が仲間をみつけられること、以上3点の親の変化を目指している。実際にペアレント・プログラムに参加した親を対象にプログラム前後での変化を調べた研究³⁾では、プログラム実施前と比較して実施後は抑うつ傾向が改善したこと、子どもへのポジティブな働きかけが増え、ネガティブな働きかけが減ったことが示されている。以上のようにペアレント・プログラムは、親の精神的健康や子どもへのかかわり方に良い影響を及ぼすことが分かっている。

子どもに関わる職種として、幼稚園教諭、保育園教諭、保育士等があげられるが、それらの職種の保育者自身のメンタルヘルスが問題視されている。例えば、保育者の身体的疲労感や慢性疲労症状が高いこと⁴⁾、保育者の84.9%が職場において何らかのストレスを感じていること⁵⁾が明らかになっている。保育者のストレスの原因としては「人間関係」、「子どもへの対応」、「知識と現場のギャップ」があげられている⁶⁾。また中島ら⁷⁾によると保育園に発達面が気になる子どもが5.4%在籍することが明らかになっている。さらに、日本保育会の調査によると、気になる子に対する保育について、「大変むずかしい」と「ややむずかしい」と考える保育士の合計割合が7割前後となっていることが示されている⁸⁾。以上より、親と同様に保育者たちも発達の気になる子たちに対する対応に悩んでいることがわかる。

以上より、幼稚園教諭等の多くはメンタルヘルスの問題を抱えており、その要因として子どもに対する対応の困難さがある可能性が考えられる。ペアレント・プログラムを支援者に対して実施した調査⁹⁾では、実施後では実施前と比べて、支援者が子どもに対して支援できることが増えたと

感じ自信をつけたことが示されている。このように、ペアレント・プログラムは親だけではなく、子どもに関わる職種にも有効な可能性がある。

そこで、本研究ではペアレント・プログラムを教師版としてアレンジしたものを幼稚園教諭に対して実施し、その精神面に対する効果と子どもに対する認知の変容、子どもの行動の変化に対する効果を検証することにした。

方法

1. 対象

長崎県内の幼稚園、認定こども園に勤めており担当クラスをもっている幼稚園教諭らを対象とした。

2. 実施方法

長崎県下のすべての幼稚園、認定こども園に対して、本プログラムのチラシを配布し、受講を希望した園に対して園単位でプログラムを実施した。プログラムは各園で教諭らの希望する時間帯に研究者らが訪問して実施した。

今回実施した、ペアレント・プログラム教師版は、原版に基づき、1回1時間の内容を2週間に一度のペースで実施した。全6回を実施するのにかかった期間はおよそ3か月であった。

原版であるペアレント・プログラムは、自分の行動と我が子の行動について親が客観的な視点を持つことで、自身と子どもの良い行動や、頑張っていることを知ること、またそれに対してほめること、困った行動への違った見方を知ること、困った行動が起きやすい要因を探すことを学ぶことが可能なプログラムである。通常ペアレント・プログラムは親が自分の子どもへのかかわりを行いながら進められ、普段交流がない親同士でグループを作り実施される。教諭らは自身が担当するクラスの中から1名の子どもを介入対象者として決め、その子どもについて理解を深めていただくようにした。ペアレント・プログラムは診断のある

子に限定して実施されることを想定して作っているわけではなく、親が子育てをしている際に育てにくさを感じていれば有効であり、子どもの発達に問題がなくても十分に意味のあるプログラムとされている。そのため今回教諭らが対象とする子どもは、自身が担当しているクラスの子どものうち、自身が関わる際に対応に悩んでいる子ども(診断の有無は問わない)とした。

各回のプログラムの内容は表1の通りである。各回は時間配分、進行の仕方が具体的にマニュアル化されている。第1回はペアレント・プログラム自体の説明、オリエンテーションが含まれるため変則的だが、それ以降の回は前回の回の内容の振り返り、前回出された宿題の発表(グループ全体で共有)、新しい内容に関して研究者より説明、説明を受けて教諭らがワークを実施する時間(「自分自身のこと」について検討する時間、「自分が対象とした子どものこと」について検討する時間)、今回の内容のまとめという流れで進行する。宿題発表の時間、教諭らのワークを実施する時間

にはそれぞれが考えた内容を2人組になって発表しあうペアワークの時間が含まれている。

研究者らは講義も行うが、参加者間のペアワークを促進することが求められている。ペアワークの際に、教諭らに対して助言をするというよりも、参加者自身が互いにお互いの考えたこと、実施したことを話すことに重きを置く。また、ペアワークを見回り、参加者の講義の理解度を確認するために、ペアワーク中の発言に耳を傾けたり、参加者らの宿題や、記入しているワークの内容を確認したりする。

本研究のプログラムの内容は、ペアレント・プログラムに準じたものの、同一園内の教諭が参加したため、プログラム実施前からお互いを知っており、対象児について共通認識があった。また教諭は園の集団の中でプログラムを実施したため、対象児以外にも教諭は関わっている。これらの点において一般的なペアレント・プログラムとは違いがあるといえる。

以上のプログラムをペアレント・プログラムの

表1. ペアレント・プログラムの内容

第1回	現状把握表を書く！ 自分のことについて書いてみよう！ ○全6回のプログラムで何を学び、どのような変化が期待できるのか伝える ○現状把握表の書き方について説明し、現状把握表に沿って保護者自身の行動を書き出す
第2回	行動で書く！ ○行動で書くポイントを伝え、保護者・子どもそれぞれの行動をより正確にとらえるようになる ○保護者や子どものいいところを見つけるポイントを伝え、意外とやれていることが多いことに気づくように促す
第3回	同じカテゴリーを見つける！ ○書き出した行動を、種類によってカテゴリーに分け、保護者・子どもの行動の全体をとらえられるようにする
第4回	ギリギリセーフ！を見つける！ ○保護者には困った行動に見えても、その中にここまでではできている(ギリギリセーフ)という部分を見つけるポイントを伝える
第5回	ギリギリセーフ！をきわめる！ ○「困った行動」と「ギリギリセーフ」が起りやすい状況の見つけ方のポイントを伝え、保護者や子どもの「ここまでではできている」をたくさん見つけられるようにする
第6回	ペアプロでみつけたことを確認する！ ○今までの内容を復習し、プログラムを通して、保護者の気持ちや子どもを見る視点がどのように変化したのか振り返る

研修を受け認定を受けた作業療法士3人が実施した。実施前、実施後に、質問紙調査を実施し、実施前後での教諭らの変化を調査した。

3. 調査項目

・教諭らの属性

性別、年代、勤務年数、最終学歴、勤務形態を聞き取っている。

・子どもの強さと困難さ尺度

(Strengths and Difficulties Questionnaire : SDQ)¹⁰⁾

Goodman (1997) によって開発された信頼性、妥当性ともに確認されている子どもの行動スクリーニングのための質問紙であり、本邦においても標準化されている。SDQは「行為」、「多動」、「情緒」、「仲間関係」、「向社会性」の5つのサブスケールの25項目からなっている。サブスケールのそれぞれの合計点からその領域における支援の必要性を明らかにすることが出来る。

また「向社会性」をのぞいた4つのサブスケールスコアの合計点からTDS (Total Difficulties Score) を算出し、全体的な支援の必要性を判定する。

本研究では、子どもの行動上の問題を評価するために使用した。

・K6

K6¹¹⁾ は米国のKesslerらによって、うつ病・不安障害などの精神疾患をスクリーニングすることを目的として開発された質問紙で、何らかの精神的な問題の程度を表す指標として広く利用されている。

6つの質問について5段階「まったくない」(0点)、「少しだけ」(1点)、「ときどき」(2点)、「たいてい」(3点)、「いつも」(4点) で点数化する。合計点数が高いほど、精神的な問題がより重い可能性があると考えられている。

・プログラムを受講しての感想 (受講後のみ)

「今回研修に参加して、ご自身の担当する子どもの行動が変わったところがありますか」、「今回研修に参加して、ご自身の仕事へのモチベーショ

ンや仕事への向き合い方に対する変化はありましたか」という2つの質問に対して「変わらなかった」、「少しだけ変わった」、「変わった」、「かなり変わった」の4段階で主観的に評価していただいた。またそれぞれに自由記述欄を設けそれぞれに関する自身のコメントがあれば記載していただいた。

4. 分析

K6とSDQの得点について、プログラム実施前、実施後で対応のあるt検定を行った。

5. 倫理的配慮

本研究は、長崎大学医歯薬学総合研究科(保健学系)倫理委員会において承認されている。(許可番号20091006)

結果

プログラムの受講を希望した幼稚園、認定こども園は全部で171園で、受講を希望し、実際にプログラムを実施できた園は20園であった。プログラムには全部で111名の教諭らが参加したが、このうち全6回のプログラムに休まず参加でき、開始前後の質問紙調査に欠損なく回答したものを調査対象とした。また、今回の質問紙調査ではSDQを使用した。3歳と4歳以上で質問の内容が違うものが存在する。今回の調査票は4歳以上のものを使用していたため、今回の分析は以上の条件に加え、対象者の観察対象児が4歳以上のものを分析対象とした。以上の条件を満たした分析対象は68名であった。

対象の属性について示す。対象はすべて女性であり、勤務年数は 7.79 ± 6.21 年であった。対象者は20代43名、30代17名、40代5名、50代3名であった。最終学歴は短大・専門学校卒業が38名、大学卒業が30名であった。勤務形態に関しては正規職員が64名、有期雇用職員が2名、パート職員が2名であった。また、彼女らが観察対象とし

た子どもは男児が58名、女児が10名、平均月齢は65.06±9.53か月であった。

各質問紙について実施前後の得点について対応のあるt検定を行った結果を表2に示した。

K6の得点、SDQの「仲間関係」、「TDS」において有意な得点の低下がみられた。また、SDQの「向社会性」において有意な得点の増加がみられた。

プログラム後の幼稚園教諭の主観的評価の結果を示す。「今回研修に参加して、ご自身の担当する子どもの行動の変わったところがありますか」の問いに対して「とても変わった」が9名(13%)、「変わった」が35名(52%)、「少し変わった」が20名(29%)、「変わらなかった」が4名(6%)であった。自由記載された回答を表3に示した。回答は研究者らが内容を確認し、同等の内容を述べていると思われるものを分類し表に記載している。なお、1人の回答者が複数の内容に関してコメントしているケースもあったため、複数回答としてそれぞれ別にカウントしている。実際の回答の文章をいくつか表に記載している。自由記載では『自発的な行動が増えた』、『情緒が安定した』、『大人の話に耳を傾けることができるようになった』、『子どもが大人と関われるようになった』、『問題行動が減った』などに集約される内容が回答されていた。「今回研修に参加して、ご自身の仕事へのモチベーションや仕事への向き合い方に対する変化はありましたか」の問いに対して「と

ても変わった」が14名(21%)、「変わった」が41名(60%)、「少し変わった」が13名(19%)、「変わらなかった」が0名(0%)であった。自由記載(表4)には、『子どもの行動を客観的にとらえられるようになった』『出来ないところよりも出来ているところに目が向くようになった』『ほめる回数が増えた』『良いところを見つけられるようになった』『子どものことを理解することで自分に余裕ができた』『仕事に前向きに取り組めるようになった』などに集約される回答があげられていた。

考察

ペアレント・プログラム教師版の実施前後での幼稚園教諭や子どもの変容を調査した。

幼稚園教諭自身の精神的健康度についてK6の得点が実施前-実施後間でスコアが有意に低下したことから、幼稚園教諭らの精神的健康にプログラムが影響を与える可能性が示された。ペアレント・プログラムは親の認知的変容を標的としている。浜田ら¹²⁾は親を対象としたペアレント・プログラムで、現状把握表を通して客観的な子どもの行動の理解や「いいところ」、「ギリギリセーフ」の発見を通して出来事に対してポジティブな意味を置く思考である肯定的再評価が起こり、抑うつ¹²⁾の低減につながったと報告していた。本調査においても、親に実施したペアレント・プログラムと同様にプログラムの過程で教諭らが子どもに対して肯定的な評価が行えるようになり、その結果K6が測定する精神的健康度に改善が見られた可能性がある。教諭らにプログラム実施後に「今回研修に参加して、ご自身の仕事へのモチベーションや仕事への向き合い方に対する変化はありましたか」とたずねた回答を見ると、「出来ないところよりも出来ているところに目が向くようになった」、「良いところを見つけられるようになった」などの子どもの行動に対して肯定的再評価が起こったことを指し示すような回答がみられてい

表2. 介入前後での対象者のK6, SDQの得点

	介入前	介入後	p
K6	6.22±5.21	5 ±4.62	0.037 *
行為	3.46±2.59	3.10±2.38	0.212
多動	7.14±2.42	6.93±2.29	0.351
情緒	3.0±2.69	3.09±2.32	0.718
仲間関係	3.76±2.14	2.96±2.32	0.000 **
向社会性	3.12±2.26	3.87±2.64	0.006 **
TDS	17.37±5.72	16.07±4.56	0.035 *

*P<0.05 **P<0.01

表3. 子どもの行動の変化に関する記述

子どもの行動の変化に関するカテゴリー	記述数	コメントの抜粋
自発的な行動が増えた	11	・ほめられたいためか、自分で良い行動を探して実行するようになった ・自分で考えて行動できるようになってきた
情緒が安定した	10	・泣くことが減った ・感情のコントロールが出来るようになった
大人の話を耳を傾けることができるようになった	5	・声をかけるとすぐに寄ってきて話を聞けるようになった ・癩癩を起すことはあるが、落ち着いて話を聞こうとする姿が見られ始めている ・宿題を実践することで、担当の子との距離が縮まったように感じた より関係性を深められたように思う。
子どもが大人と関わるようになった	5	・大人に対して少しずつ心をひらいてくれるようになった ・子どもの方から話しかけてくれることが増えた
問題行動が減った	6	・担任が子どもを以前より一歩踏み込んで見れるようになったためか、 問題行動が少し落ち着いている ・友達をたたく回数が減った
嫌がっていたことに取り組むようになった	2	・絵を描くことが嫌で絶対に描かなかったが、自主的に絵を描くようになった
落ち着いた行動が増えた	2	・イライラせずに活動に参加できるようになった
良い行動の頻度が増えた	2	・自分を出せるようになったり、周りを見れるようになった
大きな変化はなかった	3	・ほめられたり、励まされたりすることがもともと多いお子さんなので、 特に大きく変わったと感じることはありませんでした ・担当クラスが変わったため観察が出来ませんでした
子ども同士のかかわりが出来るようになった	1	・担当の子どもが他の子どもと関わるようになった
具体的記載なし	24	

※複数回答あり

表4. 自身の考え方の変化に関する記述

自分自身の変化に関するカテゴリー	記述数	コメントの抜粋
子どもの行動を客観的にとらえられるようになった	20	・子どもの困った行動がどんな時に起こるか意識して考えることができるようになってきた ・子どもの行動を細かく分析して考えられるようになった ・問題行動が起きたときにイライラするのではなく「何が嫌だったのか」と要因を考えられるようになった
出来ないところよりも出来ているところに目が向くようになった	15	・出来ているところに目を向けるようになり、自分も落ち着けるようになった ・「ここまでは出来ている」という考え方が出来るようになった ・気になる行動を見つけても、その中の良いところを見つけられるようになった
褒める回数が増えた	16	・少しでも子どものことをほめようとするようになった ・対象の子どもに加えて他の子どものこともほめるようになった
良いところを見つけられるようになった	11	・ほめるポイントがわかるようになった
子どものことを理解することで自分に余裕ができた	13	・子どもの行動が理解できたため、 予測して子どもと関わるようになり自分に余裕ができた ・子どもの行動がわかることで、ストレスが少し軽くなり余裕がうまれた
子どもに合わせたほめ方が出来るようになった	7	・ほめることで子どもの気持ちが変わるようになり、 その子にあったほめ方ができるようになった
自分の言動に気を付けるようになった	2	・自分の言動を改め相手への配慮を考えられるようになった
仕事に前向きに取り組めるようになった	2	・良いところを見つけたことで余裕がもて、保育に前向きに取り組めるようになった ・子どもを観察することで子どもの行動に発見があり、毎日の仕事が目白くなった
子どもの変化に気づけるようになった	1	
自分の考え方を知る機会となった	1	
他の先生に悩みを相談できるようになった	1	
職員間で子どものことを話す機会が増えた	1	
記載なし	7	

※複数回答あり

た。またそのほかにも「子どものことを理解することで自分に余裕ができた」「仕事に前向きに取り組めるようになった」などの仕事を行う上で余

裕が生まれたことを指し示すような回答もみられていた。これらの回答は教諭らの精神状態が主観的に改善したことを示唆している。以上より、ペ

アレント・プログラム教師版を幼稚園教諭らに実施することにより、子どもに対して肯定的な見方が出来るようになる可能性や教諭らの精神的な状態が改善する可能性が示唆された。

実施前後で教諭らが観察対象児について記載したSDQスコアは、「仲間関係」、「向社会性」の得点が有意に改善していた。SDQは主観的評価であるため、子どもが同じ行動をとったとしても観察者の評価のポイントが変化すると、結果が変わる可能性がある。また、実際に子どもの行動自体が変われば、評価する観察者の評価のポイントが変わらなくても結果が変わる。すなわち、この改善には、教諭自身の子どもの行動に対するとらえ方の変化と、実際の子どもの行動の変化、の2点が背景としてある可能性がある。以下にその2点について詳しく述べる。

教諭自身の子どもの行動に対するとらえ方の変化に関して述べる。ペアレント・プログラムでは子どもの「困った行動」の中から「出来ないことの中でもここは出来ている」という「ギリギリセーフ」の考え方を学んでいく。これは、子どもの行動が不完全であったり、不適切なものであっても細かくみても良い行動や適切な行動が隠れているという考え方である。例えば、「お集まりに参加できず、走りまわる」という困った行動があっても常日ごろその行動しかとっていないわけではなく、よくよく思い返してみると「2分間であれば参加できる」、「好きな紙芝居の間は座って参加できる」、「教諭が膝の上に座らせると参加できる」などの行動をとれることがある。このように困った行動が起きる子どもであっても必ずしも困った行動ばかりをとっているわけではないこと、なんらかの手立てをとったり環境に働きかけたりすれば出来ることを教諭自身で発見していただく。この考え方には、子どもの行動に対してポジティブな気付きを得ることが狙いとされている。そのため、プログラムを受講することにより、この「ギリギリセーフ」の考え方がスムーズにできるよう

になり、子どもの出来ていることに目が向きやすくなった可能性がある。自由記載をみると、『出来ないところよりも出来ているところに目が向くようになった』、『良いところを見つけられるようになった』というカテゴリーに分類される回答があり、子どもの状態が仮に変わっていても困った行動を見つめなおすことでその子どもの良いところを見つけ出すことが出来るようになっていく可能性が示唆される。

実際の子どもの行動が変化した可能性について述べる。教諭らの主観的評価では子どもの行動が少しでも変わったと回答したものは94%となり、子どもの行動が実際に変わった可能性が示唆された。

ペアレント・プログラムでは子どもの行動に注目し、良い行動に対しては「ほめる」ことを続けていく。ほめることはポジティブなムードや感情を生じさせ、それが動機づけを高めることが明らかにされている¹³⁾ ことから、今回の対象者が観察した子どもたちもほめられることにより動機づけが高まり、それが生活場面に影響した可能性が考えられる。

今回の調査では、SDQの得点において「仲間関係」、「向社会性」において得点が有意に改善していた。堀¹⁴⁾によると、保育士らが子どもをほめる場面では「社会・集団場面」がもっとも多くあがり、かつほめる観点のうちの一つとして「向社会的」観点があげられていた。これらより、今回対象となった教諭らも社会、集団場面で、向社会的観点で子どもをほめていた可能性がある。今回の対象児らもこれらの場面、観点でほめられることにより、社会性、対人関係が良い方向へ変わった可能性がある。また、浜田ら¹¹⁾が、183名の保護者に実施したペアレント・プログラムでは、子どもの「多動・不注意」「向社会性」のスコアが改善していたが、本研究では「多動・不注意」のスコアの改善が見られず、「仲間関係」のスコアが改善し他児、他者との関係の改善が認められた。

この相違は保護者が自らの子のみを対象に家庭でプログラム内容を実施した一方で、本研究では担任教諭が幼稚園等の集団の中で対象児以外の子どもへのかかわりも含めて実施したことが影響している可能性がある。

今回の調査では、コントロール群を設けておらず、上記したような変化がプログラムの実施によるものなのか確実な検証ができていない。今後、コントロール群との比較等を行い、具体的な効果を検証したい。

引用文献

- 1) 原口英之, 上野茜, 丹治敬之ら: 我が国における発達障害のある子どもの親に対するペアレントトレーニングの現状と課題: 効果評価の観点から. 行動分析学研究27(2): 104-127, 2013
- 2) 富永眞由美, 森俊夫: ASD治療プログラムの効果評価: 最新の知見と今後の展望. ブリーフサイコセラピー研究15(2): 97-114, 2006
- 3) 野村和代, 伊藤大幸: ペアレント・プログラムの保護者と子どもに対する効果の検討. チャイルドヘルス20(6): 22-24, 2017
- 4) 那須野康成: 保育者のストレスに関する研究(その1). 愛知学泉大学・短期大学紀要41: 113-120, 2006
- 5) 富田久枝: 保育現場におけるカウンセリングニーズの実際と課題. 財団法人こども未来財団, 2009
- 6) 松村朋子: 保育者のストレスに関する文献レビュー. 大阪総合保育大学紀要10: 203-214, 2016
- 7) 中島正夫, 竹尾晃子, 谷野亜美: 保育所に通う発達障害を持つ子ども・「気になる子」の状況について. 椋山女学園大学教育学部紀要5: 69-80, 2012
- 8) 日本保育会: 平成27年度保育所における障害児やいわゆる「気になる子」等の受け入れ実態, 障害児保育等のその支援内容, 居宅訪問型保育の利用実態に関する調査研究報告書. 2016
- 9) 厚生労働省: 平成26年度厚生労働省障害者総合福祉推進事業「市町村で実施するペアレントトレーニング」に関する調査について. 2015
- 10) Goodman R: The Strengths and Difficulties Questionnaire: A Research Note. J Child Psychol Psychiatry38: 581-586, 1997
- 11) Kessler RC, Andrews G, COLPE LJ, et al.: Short screening scales to monitor population prevalances and trends in nonspecific psychological distress: Psychological Medicine 32(6): 959-76, 2002
- 12) 浜田恵, 野村和代, 伊藤大幸他: ペアレント・プログラムによる保護者支援と支援者研修の効果. 小児の精神と神経57(4): 313-321, 2018
- 13) Blumenfeld, P., Pintrich, P., Meece, J., & Wessels, K: The formation and role of self perceptions of ability in elementary classrooms: The Elementary School Journal 82: 401-420, 1982
- 14) 堀由里: 子どもをほめる観点に関する心理学的考察-熟達者と初学者の違い-. 桜花学園大学保育学部研究紀要18: 67-75, 2018

Effectiveness of Parent Program Teacher version for kindergarten teachers

Akiko Tokunaga ¹⁾²⁾ Yuka Kubo ²⁾ Masatsugu Tsujii ³⁾
Akira Imamura ²⁾⁴⁾ Goro Tanaka ¹⁾²⁾ Ryoichiro Iwanaga ¹⁾²⁾

- 1) Akiko Tokunaga, Goro Tanaka, Ryoichiro Iwanaga, Nagasaki University, Institute of biomedical Sciences
- 2) Akiko Tokunaga, Yuka Kubo, Akira Imamura, Goro Tanaka, Ryoichiro Iwanaga, Center for Child Mental Health Care and Education, Nagasaki University
- 3) Masatsugu Tsujii, Cyukyo University
- 4) Akira Imamura, Department of Neuropsychiatry, Unit of Translational Medicine, Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences

Abstract

Parent Program (PP) is a group training program for parents who worry about their children's development. We applied PP to kindergarten teachers (Parent Program Teacher version : PPT), and examined effectiveness for changing teacher's perception of students' behavior.

We examined the changes in Kessler-K6 scores and Strength and Difficulties Questionnaire (SDQ) scores for their pupils from before and after PPT training.

The K6 scores of teachers' significantly decreased. The scores of "Peer problem, "Pro-social behavior" and "Total difficulties score" in SDQ improved from before PPT and after.

The effectiveness of PPT on teachers' mental health, perception of children behavior and children's social abilities were suggested.

PPT has the potential to change teacher's recognition of themselves and as well as children's behavior.

Key words : Parent Program Teacher version for kindergarten teachers , support of teacher